

露宿

泉鏡太郎

青空文庫

ふつか まよなか
 二日の眞夜中——せめて、たゞ夜の明くるばかりをと、一時
 せんしう おもひま みつか ごぜんさんじ なか
 千秋の思で待つ——三日の午前三時、半ばならんとする時であ
 つた。……

ほとん ごぶんお ろつぶんお
 殆ど、五分置き六分置きに揺返す地震を恐れ、また火を避
 け、はかなく焼出された 人々などが、おもひおもひに、急
 難、危厄を逃げのびた、四谷見附そと、新公園の内、外、幾
 せんまん ぐんしふ みなたが ねむり お
 千萬の群集は、皆苦き睡眠に落ちた。……残らず眠つたと言
 つても可い。荷と荷を合せ、ごぎ、筵を鄰して、外濠を隔てた
 そらすさま ほのほかげ め およ ひと／＼
 空の凄じい炎の影に、目の及ぶあたりの人々は、老も若きも、
 算を亂して、ころくくと成つて、そして萎たやうに皆倒れて居た。

——言ふまでの事ではあるまい。昨日……大正十二年九月一日午前十一時五十八分に起つた大地震このかた、誰も一睡もしたものはないのであるから。

麴町、番町の火事は、私たち鄰家二三軒が、皆跣足で逃出して、此の片側の平家の屋根から瓦が土煙を揚げて崩るゝ向側を駈抜けて、いくらか危険の少なさうな、四角を曲つた、一方が廣庭を圍んだ黒板塀で、向側が平家の押潰れても、一二尺の距離はあらう、其の黒塀に眞俯向けに取り縋つた。……手のまだ離れない中に、さしわたし一町とは離れない中六番町から黒煙を揚げたのがはじまりである。——同時に、警鐘を亂打した。が、恠くまでの激

震きしんに、四谷見附よつやみつの、高たかい、あの、火ひの見みの頂邊てつぺんに活いきて人ひとが
 あらうとは思おもはれない。私わたしたちは、雲くもの底そこで、天てんが摺半鐘すりばんを打うつ、
 と思おもつて戰慄せんりつした。――「水みづが出でない、水道すゐだうが留とまつた」と
 言いふ聲こゑが、其處そこに一團いちだんに成なつて、足あしと地ちとともに震ふるへる私わたしたち
 の耳みみを貫つらぬいた。息いきつぎに水みづを求もとめたが、火ひの注ちうい意すゐだうに水道すゐだうの如い何かん
 を試こころみた誰たれかが、早速さそくに警けい告こくしたのであらう。夢中むちうで誰たれとも覺おぼ
 えて居ゐない。其その間ま近ぢかな火ひは樹きに隠かくれ、棟むねに伏ふせ、却かへつて、斜なめ
そらの空そらはるかに、一柱いつちうの炎ほが火ひを捲まいて眞直まつすぐに立たつた。續つづいて、
ちぢく地軸ちぢくも碎くだくるかと思おもふ凄すさまじい爆音ばくおんが聞きこえた。婦をんなたちの、あつと
 言いつて地ちに領伏ひれふしたのも少すくくない。その時とき、横町よこちやうを縦たてに見通みとほ
まぞらしの眞空まぞらへ更さらに黒煙こくえんが舞起まひおこつて、北東ほくとうの一天いつてんが一いつ寸すんを餘あま

さず眞暗まつくらに代かはると、忽たちまち、どゞどゞどゞどゞどゞと言いふ、陰いん々たる律りつを帶おびた重おもく凄すこい、殆ほとんど形けい容ようの出來できない音おとが響ひびいて、
 炎ほの筋すぢを蜿うねらした可おそろ恐しい黒くろ雲くもが、更さらに煙けむりの中なかを波なみがしらの立た
 つ如ごとく、烈れつ風ふうに駈かけまはる！……あゝ迦か具ぐ土ちの神かみの鐵てつ車しゃを驅かつ
 て大都會だいとくわいを燒やきほろぼ亡しす車輪しやりんの轟とどろくかと疑うたはれた。——「あれ
 は何なんの音おとでせうか。——」然さやう何なんの音おとでせうな。——近きん鄰りんの
 人ひとの分ぶん別べつだけでは足たりない。其處そこに居ゐ合あはせた禿頭とくとう白鬚はくぜんの、
 見みも知しらない老紳士らうしんしに聞きわたしこゑふる、老紳士らうしんしの脣くちびるの
 いろいろ、尾花をばなの中なかに、たとへば、なめくぢの這はふ如ごとく土氣色つちけいろに變かは
 つて居ゐた。

——前まへのは砲兵工廠はうへいこうしやうの焚やけた時ときで、續つゞいて、日本橋本にほんばしほんち

やうのきに軒をつらに軒を連ねた薬問屋の薬ぐらが破裂したと知つたのは、五
 ろくにち六日も過ぎての事。……當時のもの可恐さは、われ等の乗
 漾ふ地の底から、火焰を噴くかと疑はれたほどである。
 が、銀座、日本橋をはじめ、深川、本所、浅草などの、
 一時に八ヶ所、九ヶ所、十幾ヶ所から火の手の上つたのに較べ
 れば、山の手は扱て何でもないのである、が、それは後
 に言ふ事で、……地震とともに焼出した中六番町の火が……
 いま言つた、三日の眞夜中に及んで、約二十六時間。尚ほ熾に
 燃えたのであつた。

しかし、其の當時、風は荒かつたが、眞南から吹いたので、
 聊か身がつてのやうではあるけれども、町内は風上だ。差

あたり、火に襲はるゝ懼はない。其處で各自が、かの親不知、子不知の浪を、巖穴へ逃げる状で、衝と入つては颯と出つゝ、かつてもと勝手許、居室などの火を消して、用心して、それに第一たしなんだのは、足袋と穿もので、驚破、逃出と言ふ時に、わが家への出入りにも、硝子、瀬戸ものの缺片、折釘で怪我をしないう注意であつた。そのうち、隙を見て、縁臺に、薄べりなどを持出した。何が何うあらうとも、今夜は戸外にあかす覺悟して、まだ湯にも水にもありつけないが、吻と息をついた處へ——

前日みそか、阿波の徳島から出京した、濱野英二さんが駈けつけた。英語の教鞭を取る、神田三崎町の第五中學へ開校式に臨んだが、小使が一人梁に挫がれたのと摺れ違ひ

に逃出したと言ふのである。

あはれ、此こそ今度の震災のために、人の死を聞いたはじめであつた。——たゞ此にさへ、一同は顔を見合はせた。

内の女中の情で。……敢て女中の情と言ふ。——此の際、

臺所から葡萄酒を二罎持出すと言ふに到つては生命がけで

ある。けちに貯へた正宗は臺所へ皆流れた。葡萄酒は安

値いのだが、厚意は高價い。たゞし人目がある。大道へ持

出して、一杯でもあるまいから、土間へ入つて、框に堆く崩れ

つんだ壁土の中に、あれを見よ、葦の生えたやうな瓶から、逃

腰で、茶碗で呷つた。言ふべき場合ではないけれども、まこ

とに天の美祿である。家内も一口した。不斷一滴も嗜まない、

いつけん 一軒となりの齒科の白井さんも、白い仕事着のまゝで傾けた。

これを二碗と傾けた鄰家の辻井さんは向う顛巻膚脱ぎの元氣

に成つて、「さあ、こい、もう一度揺つて見ろ。」と胸を叩いた。

をんな 婦たちは怨んだ。が、結句此がために勢づいて、莫塵縁臺を

引摺りく、とにかく黒堀について、折曲つて、我家々々の

むか 向うまで取つて返す事が出来た。

ふすまじやうじ 襖障子が縦横に入亂れ、雑式家具の狼藉として、化

う 性の如く、地の震ふたびに立ち跳る、誰も居ない、我が二階家

を、狭い町の、正面に熟と見て、堀越のよその立樹を廂に、

さくら 櫻のわくら葉のぱら〜と落ちかゝるにさへ、婦は聲を發て、男

はひやりと肝を冷して居るのであつた。が、もの音、人聲さへ

定かには聞取れず、たまに駈る自動車の響も、燃え熾る火の音
 に紛れつゝ、日も雲も次第々々に黄昏れた。地震も、小やみらし
 いので、風上とは言ひながら、模様は何うかと、中六の廣
 通りの市ヶ谷近い十字街へ出て見ると、一度やゝ安心をし
 ただけに、口も利けず、一驚を喫した。

半町ばかり目の前を、火の燃通る状は、眞赤な大川の
 流るゝやうで、然も風ぎた風が北に變つて、一旦九段上へ焼
 け抜けたのが、燃返つて、然も低地から、高臺へ、家々の
 おほいほ激して、逆流して居たのである。

もはや、……少々なりとも荷もつをと、きよとくと引返
 した。が、僅にたのみなのは、火先が僅ばかり、斜にふれて、下、

なか、かみ ばんちやう
 中、上の番町を、南はづれに、東へ……五番町の方へ燃
 進む事であつた。

火の雲をかくした櫻の樹立も、黒堀も暗く成つた。舊曆七月二十一日ばかりの宵闇に、覺束ない提灯の灯一つ二つ、
 婦たちは落人が夜鷹蕎麥の荷に踞んだ形で、溝端で、のどに
 支へる茶漬を流した。誰ひとり晝食を済まして居なかつたので
 ある。

火を見るな、火を見るな、で、私たちは、すぐ其の傍の四角
 にイんで、突通しに天を浸す炎の波に、人心地もなく酔つて
 居た。

時々、魔の腕のやうな眞黒な煙が、偉なる拳をかためて、

世を打ちひしぐ如くむく／＼立つ。其處だけ、火が消えかゝり、
 下火に成るのだらうと、思つたのは空頼みで「あゝ、悪いな、
 あれが不可え。……火の中へふすぶつた煙の立つのは新しく燃え
 ついたんで……」と通りかゝりの消防夫が言つて通つた——

（——小稿……まだ持出しの荷も解かず、框をすぐの小間で：
 ……を草する時……

「何うしました。」

と、はぎれのいゝ聲を掛けて、水上さんが、格子へ立つた。
 私は、家内と駈出して、ともに顔を見て手を握つた。——
 是は、預るが、水上さんは、先月三十一日に、鎌倉稻瀬川の

別荘べつさうに遊あそんだのである。別荘べつさうは潰つぶれた。家族かぞくの一人いちにんは下敷したじきに成なんなすつた。が、無事ぶじだったのである。——途中とちうで出であつたと言いつて、吉井勇よしらいさむさんが一所いっしょに見みえた。これは、四谷よつやに居ゐて無事ぶじだった。が、家の裏いへうらの竹藪たけやぶに蚊帳かやを釣つつて難なんを避さけたのださうである——)

——前まへのを續つづける。……

其處そこへ——

「如何いかゞ。」

と聲こゑを掛かけた一人ひとりがあつた。……可なつ懐かしい聲こゑだ、と見みると、孳とんさんである。

「やあ、御無事で。」

亭さんは、手拭を喧嘩被り、白地の浴衣の尻端折で、い

ま逃出したと言ふ形だが、手を曳いて……は居なかつた。引添つ

て、手拭を吉原かぶりで、艶な蹴出しの袂端折をした、前

髪のかゝり、鬢のおくれ毛、明眸皓齒の婦人がある。しつか

りした、さかり場の女中らしいのが、もう一人後についてゐる。

執筆の都合上、赤坂の某旅館に滞在した、家は一

とたま 堪りもなく潰れた。——不思議に窓の空所へ橋に掛つた襖を

傳つて、上りざまに屋根へ出て、それから山王様の山へ逃上

つたが、其處も火に追はれて逃るゝ途中、おなじ難に逢つて焼出

されたため、道傍に落ちて居た、此の美人を拾つて來たのださ

うである。

正しやうめん面の二階にかいの障子しやうじは紅くれなゐである。

黒堀くろべいの、溝端どぶばたの莫塵ごごぎへ、然さも疲つかれたやうに、ほつと、くの

字じに膝ひざをついて、婦をんな連なれんがいたはつて汲くんで出だした、ぬるま湯ゆ

で、軽かるく胸むねをさすつた。その婦をんなの風情ふぜいは媚なまめかしい。

やがて、合方あひかたもなしに、此この落人おちうどは、すぐ横町よこちやうの有ありし

島家まけへ入はいつた。たゞで通とほす關所せきしよではないけれど、下六しもろくどうちや同

町内うないだから大目おほめに見みて置おく。

次手ついでだから話はなさう。此これと對つゐをなすのは淺草あさくさの万まんちやんである。

お京きやうさんが、圓鬚まるまげの姉あねさんかぶりあねで、三歳みつつのあかちやんを十じふ

字じに背中せなかに引背負ひつしよひ、たびはだし。万まんちやんの方は振分ふりわけの荷にを

肩かたに、わらぢ穿ばきで、雨あめのやうな火ひの粉この中なかを上野うへをさして落おちて
行ゆくと、揉もみ返かへす群集ぐんしふが、

「似合にあひます。」

と湧わいた。ひやかしたのではない、まつたく同どう情じやうを表へうした
ので、

「いたはしいナ、畜ちく生しやう。」

と言いつたと言いふ——真ほん個たうか知しらん、いや、嘘うそでない。此これは私わたし
の内うちへ來きて（久保勘くぼかん）と染そめた印しるし半纏ばんてんで、脚きゃはん絆はんの片かたあしを
舉あげながら、冷酒ひやざけのいきづきで御當人ごたうにんの直話ぢきわなのである。

「何どうなすつて。」

少時しばらくすると、うしろへ悠然いっぜんとして立つた女性にょしやうがあつた。

「あゝ……いまでも風説うはきをして、案あんじて居ゐました。お住居すまひは澁谷しぶやだが、あなたは下町したまちへお出掛でかけがちだから。」

と私は息いきをついて言いつた、八千代やちよさんが來たのである、四谷よつや坂町かまちの小山内をさないさん（阪地はんち滞たい在中いざいちゆう）の留守見舞るすみまひに、澁谷しぶやから出でて來きなすつたと言いふ。……御主人ごしゆじんの女をんなの弟子でしが、提灯ちやうちんを持もつて連立つれだつた。八千代やちよさんは、一寸薄化粧ちよつとすげしやうか何かなにで、鬢びんも亂みださず、杖つゑを片手かたてに、しやんと、きちんとしたものであつた。

「御主人ごしゆじんは？」

「……冷蔵庫れいぞうこに、紅茶こうちやがあるだらう……なんか言いつて、呆あきれつ了ちまひますわ。」

これは偉い！……畫伯の自若たるにも我折つた。が、御當人の、すまして、これから又澁谷まで火を潜つて歸ると言ふには舌を卷いた。

「兩戸をおしめに成らんと不可ません。些と火の粉が見えて來ました。あれ、屋根の上を飛びます。……あれがお二階へ入りますと、まつたく危うございますで、ございますよ。」

と餘所で……經驗のある、近所の産婆さんが注意をされた。實は、炎に飽いて、炎に背いて、此の火たとひ家を焚くとも、せめて清しき月出でよ、と祈れるかひに、天の水晶宮の棟は櫻の葉の中に顯はれて、朱を塗つたやうな二階の障子が、いま

その影にやゝ薄れて、凄くも優しい、威あつて、美しい、薄桃
 いろに成ると同時に、中天に聳えた番町小學校の鐵柱
 の、火柱の如く見えたのさへ、ふと紫にかはつたので、消すに
 みづ水のない劫火は、月の雫が冷すのであらう。火勢は衰へたや
 うに思つて、微に慰められて居た處であつたのに——
 わたしとはう 私は途方にくれた。——成程ちらくと、……

「ながれ星だ。」

「いや、火の粉だ。」

空を飛ぶ——火事の激しさに紛れた。が、地震が可恐いたため
 町にうろついて居るのである。二階へ上るのは、いのち懸でなけ
 れば成らない。私は意氣地なしの臆病の第一人である。然

うかと言つて、焚^もえても構^{かま}ひませんと言^いはれた義理^{ぎり}ではない。

濱野^{はまの}さんは、其^その元園^{もとそのちやう}町^{げしゆく}の下宿^{やうす}の様子^みを見^みに行^いつて居^ゐた。

——氣^きの毒^{どく}にも、其^その宿^{やど}では澤山^{たくさん}の書籍^{しよせき}と衣類^{いるぬい}とを焚^やいた。
 家内^{かない}と二人^{ふたり}で、——飛込^{とびこ}まうとするのを視^みて、

「私^{わたし}がしめてあげます。お待^まちなさい。」

白井^{しらゐ}さんが懐^{くわい}中電燈^{ちゆうでんとう}をキラリと點^つけて、さう言^いつて下^{くだ}すつ

た。私^{わたし}は口吃^{くちきつ}しつゝ頭^{かうべ}を下げた。

「俺^{わし}も一番^{ひとつ}。」

で、來合^{きあ}はせた馴染^{なじみ}の床屋^{とこや}の親方^{おやかた}が一^{いつ}所^{しよ}に入^いつた。

白井^{しらゐ}さんの姿^{すがた}は、火^ひよりも月^{つき}に照^てらされて、正^{しやう}面^{めん}の縁^{えん}に立^た

つて、雨戸^{あまど}は一^{いち}枚^{まい}づゝがらゝと閉^{しま}つて行^ゆく。

此の勢に乗つて、私は夢中で駈上つて、懷中電燈の燈を
 借りて、戸袋の棚から、觀世音の塑像を一體、懷中し、
 つくゑした机の下を、壁土の中を探つて、なき父が彫つてくれた、私の眞
 んちう 鑰の迷子札を小さな硯の蓋にはめ込んで、大切にしたのを、
 さいは 幸ひに拾つて、これを袂にした。

私たちは、其から、御所前の廣場を志して立退くのに間はな
 かつた。火は、尾の二筋に裂けた、燃ゆる大蛇の兩岐の尾の
 ごと 如く、一筋は前のまゝ五番町へ向ひ、一筋は、別に麴
 ち 町の大通を包んで、此の火の手が襲ひ近いたからである。

「はぐれては不可い。」

「荷を棄てても手を取るやうに。」

口々^{くち／＼}に言ひ交^{かは}して、寂然^{しん然}とした道^{みち}ながら、往來^{ゆききあ}の慌^あしい町^{まち}を、白井^{しらゐ}さんの家族^{かぞく}ともろとも立退^{たちひ}いた。

「泉^{いづみ}さんですか。」

「はい。」

「荷^にもつを持つて上^あげませう。」

おなじむきに連立^{つれだ}つた學生^{がくせい}の方が、大方^{おほかた}居^ゐまはりで見知^{みしりご}

越^しであつたらう。言^いふより早^{はや}く引擔^{ひつかつ}いで下^{くだ}すつた。

私^{わたし}は、其^その好意^{かうい}に感謝^{かんしや}しながら、手^てに持^もちおもりのした慾^{よく}を

恥^はぢて、やせた杖^{つゑ}をついて、うつむいて歩^{ある}行き出^だした。

横^{よこ}町^{ちやう}の道^{みち}の兩^{りやう}側^{がは}は、荷^にと人^{ひと}と、兩^{りやう}側^{がは}一^{ふた}列^{ならび}の人^{ひと}

のたゞずまひである。私^{わたし}たちより、もつと火^ひに近^{ちか}いのが先^{さき}んじて

此の町内へ避難したので、……皆茫然として火の手を見て居る。赤い額、蒼い頬——辛うじて煙を拂つた絲のやうな残月と、火と炎の雲と、埃のもやと、……其の間を地上に綴つて、住める人もないやうな家々の籬に、朝顔の蕾は露も乾いて萎れつゝ、おしろいの花は、緋は燃え、白きは霧を吐いて咲いて居た。

公園の廣場は、既に幾萬の人で満ちて居た。私たちは、其の外側の濠に向つた道傍に、やうく地のまゝの蓆を得た。

「お邪魔をいたします。」

「いゝえ、お互様。」

「御無事で。」

「あなたも御無事で。」

つい、隣となりに居ゐた十四五人じふしごにんの、殆ど十二三人ほとんじふにさんにんが婦人ふじんの一家いつかは、浅草あさくさから火ひに追おはれ、火ひに追おはれて、こゝに息いきを吐ついたさうである。

見みると……見渡みわたすと……東南とうなんに、芝しば、品川しながはあたりと思おもふあたりから、北きたに千住せんぢう浅草あさくさと思おもふあたりまで、此この大都だいとの三さん面めんを弧こに包つんで、一面いちめんの火ひの天てんである。中なかを縫ぬひつゝ、渦うづを重かさねて、燃上もえあがつて居ゐるのは、われらの借家しやくやに寄よせつゝある炎ほのほであつた。

尾籠びろうながら、私わたしはハタと小用こように困こまつた。辻便所つじべんじよも何なんにもない。家内かないが才覺さいかくして、此この避難場ひなんばに近い、四谷よつやの髪結かみゆひさんの許もとを

たよつて、人を分け、荷を避けつゝ辿つて行く。……ずるぶん露地を入組んだ裏屋だから、恐るゝ、それでも、崩れ瓦の上を踏んで行きつくと、戸は開いたけれども、中に人氣は更にない。おなじく難を避けて居るのであつた。

「さあ、此方へ。」

馴染がひに、家内が茶の間へ導いた。

「どうも恐縮です。」

と、うつかり言つて、挨拶して、私たちは顔を見て苦笑した。手を淨めようとすると、白濁りでぬらゝする。

「大丈夫よ——かみゆひさんは、きれい好で、それは消毒が入つて居るんですから。」

わたしは、とる帽もなしに、一禮して感佩した。

夜が白んで、もう大釜の湯の接待をして居る處がある。

この歸途に、公園の木の下で、小枝に首をうなだれた、洋

傘を疊んだばかり、バスケット一つ持たない、薄色の服を着

けた、中年の華奢な西洋婦人を視た。——紙づつみの鹽

煎餅と、夏蜜柑を持つて、立寄つて、言も通ぜず慰めた人が

ある。私は、人のあはれと、人の情に涙ぐんだ——今も泣かるゝ。

二日——此の日正午のころ、麴町の火は一度消えた。立

派に消口を取つたのを見届けた人があつて、もう大丈夫と言

ふ端に、待構へたのが皆歸支度をする。家内も風呂敷包を

提げて駈け戻つた。女中も一荷背負つてくれようとする處を、

その處が急所だと消口を取つた處から、再び猛然として煤の
 やうな煙が黒焦げに舞上つた。渦も大きい。幅も廣い。尾と頭を
 もつて撃つた炎の大蛇は、黒蛇に變じて剩へ胴中を蜿らして
 いへくを巻きはじめたのである。それから更に燃え續け、焚け擴
 がりつゝ舐め近づく。

一度内へ入つて、神棚と、せめて、一間だけもと、玄關
 の三疊の土を拂つた家内が、又此の野天へ逃戻つた。私たち
 ばかりでない。——皆もう半ば自棄に成つた。

もの凄いと云つては、濱野さんが、家内と一所に何か罐
 詰のものでもあるまいかと、四谷通へ夜に入つて出向いた時
 だつた。……裏町、横通りも、物音ひとつも聞えないで、

静まり返つた中に、彼方此方の窓から、どしんくと戸外へ荷物
 を投げて居る。火は此處の方が却つて押つゝまれたやうに激しく
 見えた。灯一つない眞暗な中に、町を歩行くものと言つては、
 まだ八時と言ふのに、殆ど二人のほかほか言つたと言ふ。

罐詰どころか、蠟燭も、燐寸もない。

通りかゝつた見知越の、みうらと言ふ書店の厚意で、莫塵
 を二枚と、番傘を借りて、砂の吹きまはす中を這々の體で歸
 つて來た。

で、何につけても、殆どふて寢でもするやうに、疲れて倒れて
 寢たのであつた。

却説——その白井さんの四歳に成る男の兒の、「おうちへ歸らうよ、歸らうよ。」と言つて、うら若い母さんとともに、私たちの胸を疼ませたのも、その母さんの末の妹の十一二に成るのが、一生命に學校用の革鞆一つ膝に抱いて、少女のお伽の繪本を開けて、「何です。こんな處で。」と、叱られて、おとなしくたゝんで、ほろりとさせたのも、宵の間で。……今はもう死んだやうに皆睡つた。——

深夜。

二時を過ぎても鶏の聲も聞えない。鳴かないのではあるまい。燃え近づく火の、ぱちくく、ぐわうくどツと鳴る音に紛るゝのであらう。唯此時、大路を時に響いたのは、肅然たる騎

馬ばのひづめの音おとである。火ひのあかりに映うつるのは騎士きしの直ちよく劍けんの影かげである。二人三人ふたりみたりづゝ、いづくへ行くとも知らしず、いづくから來くるとも分わかず、とぼくした女をんなと男をとこと、女をんなと男をとこと、影かげのやうにたゞよさまよ迎むかひ徜徉たゞよふ。

私わたしはじつとして、又またたゞひとへに月つき影かげを待まつた。

白井しらゐさんの家族かぞくが四人よにん、——主人しゅじんはまだ焼やけない家いへを守まもつて

こゝにはみえない——私わたしたちと、……濱野はまのさんは八千代やちよさんが折を

紙りがみをつけた、いゝ男をとこださうだが、仕方しかたがない。公園こうえんの圍かこの草く

畝さあぜを枕まくらにして、うちの女ぢよちう中ひとと一つ毛布けつとにくるまつた。これに

鄰となつて、あの床屋とこやし子が、子供こども弟子でし子しづれで、仰あふむ向けに倒たふれて居ゐる。

僅わづかかひとつぼ坪ぼたらずの處ところへ、荷にを左右さいうに積つんで、此この人數にんずである。

もの干棹ほしぎをにさしかけの莫蔭ごぎの、しのぎをもれて、外そとにあふれた人ひとたちには、傘かさをさしかけて夜露よつゆを防ふせいだ。

が、夜風よかぜも、白露しらつゆも、皆夢みなゆめである。其その風かぜは黒く、其その露つゆも赤あかからう。

唯と、こゝに、低い草畝ひくくさあぜの内側うちがはに、露つゆとともに次第しだいに消え行く、提灯ちやうちんの中に、ほの白く幽しろうかすかに見えて、一ひと張はりの天幕テントがあつた。——晝間ひるま赤い旗はたが立つて居ゐた。此この旗はたが音おともなく北きたの方ほうへ斜なに靡なびく。何處どこか大商店だいしやうてんの避難ひなんした……其その店員てんゐんたちが交代かうたいに貨物くわもつの番ばんをするらしくて、暮くれ方がたには七三しちさんの髪かみで、眞ま白しろで、この中なかで友染いうぜん模様もやうの派手はでな單衣ひとへを着きた、女優ぢよいうまがひの女店員をんなてんゐん二三にさん人の姿すがたが見みえた。——其その天幕テントの中なかで、此この

深しん更かうに、忽たちまち笛ふえを吹ふくやうな、鳥とりの唄うたふやうな聲こゑが立たつた。

「……泊とまつて行ゆけよ、泊とまつて行ゆけよ。」

「可いや厭やよ、可いや厭やよ、可いや厭やよう。」

聲こゑを殺ころして、

「あれ、おほゝゝゝ。」

やがて接吻キッスの音おとがした。天幕テントにほんのりとあかみが潮さした。が、

やがて暗くらく成なつて、もやに沈しづむやうに消きえた。魔まの所業なすわざではな

い、人にんげん間の舉動ふるまひである。

私わたしは此これを、難なんずるのでも、嘲あざけるのでもない。況いはんや決けつして羨うらやむ

のではない。寧むしろ其その勇氣ゆうきを稱たふるのであつた。

天幕テントが消きえると、二十二日にちの月つきは幽かすかに煙けむりを離はなれた。が、向むかう土ど

てまつて
 手の松も照らさず、此の莫蔭の廂にも漏れず、煙を開いたかと思ふと、又閉される。下へ、下へ、煙を押し、押分けて、松の梢にかゝるとすると、忽ち又煙が、空へ、空へとのぼる。斜面の玉女が咽ぶやうで、悩ましく、息ぐるしさうであつた。

えもん ほそ
 衣紋を細く、圓鬚を、おくれ毛のまゝ、ブリキの罐に枕して、緊乎と、白井さんの若い母さんが胸に抱いた幼児が、怯えたやうに、海軍服でひよつくりと起きると、ものを熟と視て、みつめて、むくりと半ば起きたが、小さい娘さんの胸の上へ乗つて、乗ると上つて、ころりと俵にころがつて、すやくと其のまゝ寢た。

わたし ひぎ
 私は膝をついて總毛立つた。

唯今、寢おびれた幼をさないの、熟じつと視みたものに目を遣やると、狼おほかみとも、虎とらとも、鬼おにとも、魔まとも分わからない、凄すさましい面つらが、ずらりと並ならんだ。……いづれも差置さしおいた荷にの恰好かつかうが異類いるあ異形いぎやうの相さうを顯あらはしたのである。

最も間近もつとまぢかかつたのを、よく見みた。が、白しろい風呂敷ふろしきの裂さけめは、四角しかくにクハツとあいて、しかも曲ゆがめたる口くちである。結目むすびめが耳みみである。墨繪すみゑの模様もやうが八角はつかくの眼まなこである。たゞみ目が皺しわ一つづつ、いやな黄味きみを帯おびて、消きえかゝる提灯ちやうちんの影かげで、ひくく〜と皆みな揺ゆれる、※々《ひゝ》に似にて化猫ばけねこである。

私は鶴わかしぬえと云いふは此これかと思おもつた。

其その鄰となり、其その鄰となり、其その上うへ、其その下した、並ならんで、重かさなつて、或あるひあをは青あをく、

あるひあか、あるひくろ
 或は赤く、或は黒く、凡そ白ほどの、變な、可厭な獸が幾つとも

なく並んだ。

みなおそろし
 皆可恐い夢を見て居よう。いや、其の夢の徴であらう。

そ
 其の手近なの、裂目の口を、私は餘りの事に、手でふさいだ。

ふさいでも、開く。開いて垂れると、舌を出したやうに見えて、

ふろしきづつみ
 風呂敷包が甘澁くニヤリと笑つた。

つゞ
 續いて、どの獸の面も皆笑つた。

そのとき
 爾時であつた。あの四谷見附の火の見櫓は、窓に血をはめた

やうな
 眼を睜いて、天に冲する、素裸の魔の形に變じた。

どて
 土手の松の、一樹、一幹。啊呷に肱を張つて突立つた、赤

き、黒き、青き鬼に見えた。

が、あらず、それも、後に思へば、火を防がんがために粉骨
 したまふ、焦身の仁王の像であつた。

早や、煙に包まれたやうに息苦しい。

私は婦人と婦人との間を拾つて、密と大道の夜氣に頭を冷さ

うとした。——若い母さんに觸るまいと、ひよいと腰を浮かして

出た、はずみに、此の婦人の上にかざした蛇目傘の下へ入つて、

頭が支へた。ガサリと落すと、響に、一時の、うつゝの睡を覺

すであらう。手を其の傘に支へて、ほし棹にかけたまゝ、ふら／

＼と宙に泳いだ。……この中でも可笑い事がある。

——前刻、草あぜに立てた傘が、パサリと、ひとりで倒れると、

下に寝た女中が、

「地震。」

と言つて、むくと起返る背中に、ひつたりと其の傘をかぶつて、首と両手をばたくと動かした……

いや、人ごとではない。

私は露を吸つて、道に立つた。

火の見と松との間を、火の粉が、何の鳥か、鳥とともに飛び散つた。

が、炎の勢は其の頃から衰へた。火は下六番町を焼かずに消え、人の力は我が町を亡ぼさずに消した。

「少し、しめつたよ。起きて御覽、起きて御覽。」

婦人たちの、一度に目をさました時、あの不思議な面は、上

藹らふのやうに、翁おきなのやうに、稚兒ちごのやうに、和なごやかに、やさしく成なつて莞爾にっこりした。

朝あさ日は、御所ごしよの門もんに輝かがき、月つきは戎劍じうけんの閃影せんえいを照てらした。

——江え戸どのなごりも、東とう京きやうも、その大たい抵ていは焦土せうどと成なんぬ。茫ぼう々くたる焼野原やけのはらに、ながき夜よを鳴なきすだく蟲むしは、いかに、蟲むしは鳴なくであらうか。私わたしはそれを、人ひとに聞きくのさへ憚はげらるゝ。

しかはあれど、見みよ。確たしかに聞きく。淺草寺あさくさでらの觀世音くわんぜおんは八は方っぽうの火ひの中なかに、幾いく十じふ萬まんの生命いのちを助たすけて、秋あきの樹立こたちもみどりにして、仁王門にわうもん、五重ごぢうの塔たふとともに、柳やなぎもしだれて、露つゆのしたゝるばかりおごそかけだかやけのこ焼やけのこ残こつた。塔たふの上うへには鳩はとが群むれ居ゐ、群むれ遊あそぶさう

である。尚ほ聞く。花屋敷の火をのがれた象は此の塔の下に生

きた。象は寶塔を背にして白い。

普賢も影向ましますか。

若有持是觀世音菩薩名者。

設入大火。火不能燒。

由是菩薩。威神力故。

大正十二年十月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「露宿《ろしゆく》」とルビがついています。
入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露宿

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>